



TITLE:

統計學史上に於けるジュースミル ヒの地位

AUTHOR(S):

青盛, 和雄

CITATION:

青盛, 和雄. 統計學史上に於けるジュースミルヒの地位. 經濟論叢 1943,
56(3): 317-332

ISSUE DATE:

1943-03

URL:

<https://doi.org/10.14989/131988>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

經濟論叢

第五十六卷第三號
昭和十八年三月

論叢

利子論序說の一節……………文學博士 高田保馬

貨幣の形態的變遷と金融意義の發展……………經濟學博士 小島昌太郎

交易營團の成立……………經濟學博士 谷口吉彥

トーマス・マンの『財寶論』……………經濟學士 白杉庄一郎

インテレッツセンゲマインシャフト……………經濟學士 靜田均

研究

統計學史上に於ける
ジュースミルヒの地位……………經濟學士 青盛和雄

說苑

再び新經濟論理の數式的展開に就て……………經濟學博士 柴田敬

元代貨幣思想抄……………經濟學士 穗積文雄

研究

統計學史上に於けるジュースミルヒの地位

青 盛 和 雄

曩に「ジュースミルヒの人口學觀」¹⁾と題して本誌に紹介を試みて置いたのは主としてヨーンに典據したのであるが、其後も二三の文獻にジュースミルヒが問題とされ又は引證されてゐるにも拘らず、猶未だ彼と其著作への理解が充分とは思考され得ないので、茲では一應クラムに依つて彼の著作「神的秩序」が如何に解題されてゐるかを窺つて見る事にしよう。²⁾

既に一八九七年にウイルコックス教授と共同著述の形式にてジュースミルヒの著作目錄を編成せる Frederick S. Cum に就ては、統計學經濟學及社會學を専攻しこのジュースミルヒの統計的著作に就いての論文を Cornell University に今世紀初頭に於て所謂 a doctor's dissertation として提出したといふ事實以外には何等知る所がない。従つてクラムの出身經歷も不明であつて、獨逸人たるヨーンやシウルツエとの立場に於ける相違を検討し得る迄には立至り得ないが、少くともジュースミルヒの本國に於ける再評價に役立ち、惹ひては國境を超えてジュ

1) 經濟論叢、第五十四卷、五號、(昭和十七年五月) 掲載。
2) 寺尾琢磨「ジュースミルヒの單妻論」人口問題、第五卷、一號、(昭和十七年九月) 62頁—69頁 中川友長 岡崎文規共著、統計學要綱¹⁾ (昭和十七年五月) 7頁、參照。

ースミルヒの理念が復活し得る機縁ともなるであらう。クラムは「神的秩序」に現はれて居る人口理論に關しても悉細なる記述を試みてゐるけれども、茲では彼の統計學史上の地位を月旦せる範圍内に問題を限定し、著作の内容特に「神的秩序」の初版⁴⁾と再版との間に存する相違に就いては結論的に概略之に觸れ得るに過ぎない。

此際に於て神的秩序と類似なる論題の下に一七五二年のウンガーに依る著作が擧げられるけれども、後者よりも前著の方がヨリ精密にして國民經濟學に於て占むる役割も大なりとされて居ること並びに伯林市史にも有名な國民經濟學者としてジュースミルヒの言を引用せることを掲げて置く必要があらう。何故ならばジュースミルヒを所謂の神學的なる傾向から社會統計學の道統の本流に呼び戻すことが本稿の副目的でもあるからである。

二

人間の生死現象は多數を採れば法則性を有するといふ事實の發見は十七世紀の英國人グラントに負ふて居り、之に追隨し之を繼承したる人々としてペッティ¹⁾(W. Petty), キング²⁾(G. King), ハルリー³⁾(Ed. Halley)等の一聯の政治算術學者が存することは、今更の如く詳述する必要はない。茲では斯る英國に於ける先驅者の到達せる注目すべき結論から好氣心を起したジュースミルヒが人口なる對象を研究するに至つたといふ事情を解説の端著にすれば足るのである。神的秩序は英人が爲し來つたよりもヨリ悉細にして精微なる解析を試みたる成果であると云へる。

ジュースミルヒは彼以前の政治算術學派の人々に於けるよりも生死現象に弘布せる規則性を比較的ヨリ多く強調して居る。彼の主要目的は人口大量の觀察に際して出生・結婚・死亡の諸現象に内在する因果關係及び法則性に對する齊一を決定するにあり、又其の主要なる關心は人類種族が支配されてゐる諸變化中に觀察されてる秩

3) Frederick S. Crum; The statistical work of Süssmilch, Quarterly Publications of the American Statistical Association. Boston 1901. New Series.

4) 高野岩三郎著「改訂増補社會統計學史研究」論文 第四「ジュースミルヒの神的秩序の初版に關する若干の考證と紹介」123頁—172頁、(昭和十七年七月)

序なるものに集中的に注がる。此際に於て秩序とは生死現象の相關並びに繼起の中に弘布せる齊一を意味する。ジュースミルは當時の秩序とは今の普通の獨逸語では *Gesetze und Gesetzmässigkeit* (法則又は法則性) といふ言葉で書き現はされてゐるのと同じの表現である。尤も彼は法則と秩序とを屢々交互に使用せる模様である。²⁾

この人口變動に内在せる秩序に重點が置かれて居り、國家及び諸國の狀態を記述するものとして統計資料に觸れて居るのは單なる偶然的意義を認めたるに過ぎず、從つて其の主要著作を一七四九年に始めて出版した *Achenwald*³⁾ に依つて最もよく代表されて居る所謂獨逸大學派の統計學者とは遙かに區別がある。アッヘンワールの統計學概念が人口の分析を重要視するのは主として人口の數及び狀態の智識が國力並びに一般福祉に對して貴重な手掛りを與へるからである。斯る概念に於ては統計學とは行政或は政治目的の爲に國狀を記述することである。ジュースミルは單に人口統計を取扱へるのみならず、而もこの限定されたる分野に於て資料の詳細なる解析を企てるに當つて自己の意の儘に之を遂行してゐる。あらゆる利用可能の源泉から資料は蒐集整備されて、主として特定國及び諸國の狀態に關する智識を獲得するといふ見地のみに止らず、特定事件の人生に於ける因果的なる相互依存の關係に就いての問題を解決せんとする目的の爲にも資料を活用した。

されば神秩序的の第二版は人口統計學史に於ける第一期に效果ある終止符を打つと共に、新しき第二期を劃せるものとも認められよう。⁴⁾ 白耳義人ケトレー *Quetelet* (1796-1874) は十七世紀の英國人以降、十八世紀中葉の和蘭なるシュトルツク (*Stuyck*) 及びケルセボーム (*Kersboom*) や普魯西に於けるジュースミルヒ等に依つて布石された分野で活躍せる次代に於ける卓越せる學者であつた。⁵⁾ ジュースミルヒとケトレー兩人の主要目的は社會生活に於ける法則の齊一を研究することである。彼等は斯くも複雑なる現象間に於て規則性が存することに就ては相一

- 5) J. F. Unger, Von der Ordnung der Fruchtpreise und deren Einflusse in die wichtigsten Angelegenheiten des menschlichen Lebens, Göttingen, 1752.
- 6) M. Arendt, u. etc. Geschichte der Stadt Berlin, 1937, S. 270.
- 1) 財部靜治著「ケトレーノ研究」45-51頁。私は J. Graunt を斯く呼ぶ。

致したが、説明に於ては非常に異ふ。ジュースミルヒに於ては説明を神性に求めるに對し、ケトレイは法則を數學式に歸してゐる。ジュースミルヒからケトレイへの進行は社會生活に存する法則の齊一に關して神學や目的論的なものから數學的・物理學的・概念への進行である。後者は前者よりも大數を採ることが生死及び社會現象に於ける規則性に必須なる所以を更に徹底的に主張す。ケトレイは豫算として居る概念を、ジュースミルヒは死亡率・利子と呼んでゐる。

十七八世紀の人口論者が皆遭遇せる周到なる研究への容易ならぬ障害は人口の正確なる調査を缺くことであつた。尤も大部分の國々では十七世紀中には人口調査が行はれたにしても、概して一地方或は特定都市に限られ、假令全國人口が必要な場合でも種々な方法を使つて推測されたに過ぎず、十八世紀には多少の進歩が特に佛蘭西や普魯西であつたばかりである。即ちフリードリヒ大王の下で一七四八年に普國に於て全く正規なる人口調査が爲された。典型的平均の算出に當り、ジュースミルヒは一七四七年より五五年までの伯林及び一七四八年のブラデンブルグで數へ上げられたる生存住民數に殆んど専ら依據してゐる。之等は其結果の根據となつた唯一の實地調査であつた。

神的秩序に包含されてゐる資料の求められた主要源泉は普國英國和蘭瑞典佛國及び伊太利の諸都市農村其他の田舎地方に於ける教會記録であつた。英國の表は十六世紀末から完備して居り、佛蘭西では十七世紀中葉から普魯西では十七世紀末からになる。全ての早期諸表は往々にして國家の法令や權威と共に教會に依つて一般に保存されて居る。其故に之等は洗禮婚禮及び葬禮であり、斯る諸表はある學式が其と關係の有無に全く拘はりなく事實を記録することが目的である國民登録に依りて獲得せられる資料程に充分なものではない。若し吾々が此際に

2) J. P. Süssmilch, Die göttliche Ordnung. Ausg. 4, 1775, Teil I, S. 51.

3) Achenwall; Abriss der neuesten Staatswissenschaft etc., 1749.

4) G. F. Knapp; Theorie des Bevölkerungs-Wechsels. Abhandlungen zur angewandten Mathematik, Braunschweig, 1874. SS. 55—56.

人口統計として蒐集し編纂する爲に使用される方法が如何に貧弱なものであるかに想到すれば、其諸資料を熟達せる結合と鋭利なる解析に依りてジュースミルヒが獲得し活用することの出来た成果が如何に絶大であつたかが眞に注目すべき事となる。

ジュースミルヒに依りて進歩せる主要統計命題は現代の人口統計に採つても基礎的と見做されねばならぬ。一方に於て彼の結論は一般に眞實として認められては居るが、他方では彼は資料の説明に際し往々にして餘りに廣義に擴張し過ぎる傾向を示すこともある。時には自説の根據たるべき資料が一般化を保證するのに不十分な場合でも之を一般に斯くありと概説してゐる。斯る傾向の驚くべき一例は、死亡數が判明して居れば、死亡一人當りの住民數を示すと見做される一定の乘數を使用することに依り人口總數が得られるが如きである。一七四八年の調査で人口が判明せるブランデンブルグの死亡率の計算からジュースミルヒは死亡數と一定關係にある人口を産出して居るが、尤もこの比率は大都市や小都市及び田舎地方では多少異つてゐる。斯様な比率をも彼は性急なる想定から近似的なりとして同一の比率を到る處に妥當すると考へ、結局に於てある地域の年々の死亡數が判明すれば住民數が計算される。蓋し死亡數だけ知れば一國人口數に就いて信頼に値する指標が得られる場合は殆どないとする事は苟くも現代の統計學に疎縁ならざる人なら誰にも自明な事柄である。

結婚及び出生統計の取扱並びに結婚出産力の議論に於てジュースミルヒは其先驅者達に依存する點は最も小である。此論題に就て考慮すべき斟酌は慣習並びに經濟的條件が結婚と出生に即ち各結婚當り出生數の平均に及ぼす影響に就いて爲されて居る。死亡及び疾病の議論はこの觀點からは餘り充分ではない。⁵⁾

神的秩序の全體を通じて科學的見地からする最大の缺點はその神學的方向にある。⁶⁾併し乍らこの缺點でさへジ

- 5) ケトレー はジュースミルヒを知る ことなし云々、Wagner; Statistik, 大内氏邦譯書、ワーグナー 統計學¹ 96—7頁、參照。
6) Quételet; Physique sociale, vol. i. P. 96. (Budget) (Zins für Sterblichkeit).
7) Süßmilch, die göttliche Ordnung. Teil I. Appendix SS. 2—8.

ユースミルヒが牧師であつた事實に想到すれば大いに申し譯になることかも知れない。若し彼が牧師として經濟や政治の問題に容喙するに就いて、何等かの尤もらしい口實を備へ附けねばならないと感じてゐなかつたとしたら、そんなに多くの頁を神學的考察に割くことも敢てしなかつたであらうとするのは全く妥當である。この點に於ける斯様な諸評論家達の非難の必ずしも當らざる所以は後に結論で觸れようと思ふ。

三

ジュースミルヒの人口理論は其時代及び國家の特殊事情に依りて規定すること大なりしは疑ひない所であつた。十八世紀に於ける普國は急速に其領域を擴大し産業を發展せしめづゝあり、而もこの膨脹は特にフリードリヒ大王（一七四〇—八六）の治世期に於て急激であつた。青春に當める軍國たりし普國はヨリ大なる人口を必要とし、フリードリヒの政策もこの喫緊性を認めて居たので、外國人を普國に來住せしめるあらゆる勧誘を試みられ、一七四〇年から五六年に至る期間に於て或州に十萬人以上の植民者が移入され、熟練せる職人達を引入れる爲に特別の誘因が提供され、來住者に普國內定住の説得が爲された。斯くてフリードリヒに依りて遂行された國內植民の組織は主として自然が恵みを垂れてゐないか或は風雨に荒廢の儘に放任されてゐるか若しくは耕作が等閑に附せられてゐる國土の生産力を同收するといふ見地に立つてゐた。

フリードリヒの人口に關する理念や經濟方策は國家の最大繁榮を確保するに最適であり、且つジュースミルヒに依りて前進せしめられたものとも符合す。即ち來住獎勵や嚴格なる保護政策は國家の戦争力及び擔稅力増加並びに年々の穀物増產獎勵の爲にも、又斯くて普國を隣國に依存せしむる程度を減少さし、次には貿易の有利なる均衡を確保する目的の爲に産業を獎勵せんとして採用された計畫の一端でもあつた。普國は絶大なる國庫收入

8) *ibid.* Teil II. § 441—517.9) T. E. Young. *On Centenarians*, p. 30. ヤングはジュースミルヒを批判して科學以前の段階に於ける物理的考察にあり勝ちな説謬に陥れりと云ふ。

を必要とした。フリードリヒの政策は國家の歳入増加を確保せんが爲に新税の賦課や既往の課税引上のみに依らずして擔税能力ある財産總額や納税者數の増加をも計るといふ方法を探ることであつた。

ジュースミルヒは普國に弘布せる諸條件を概觀して人爲的に人口増加を刺戟するあらゆる手段の重要性を強張した。この點に關してマルサスは其結論こそジュースミルヒの到達せる所と正反對であつたにしても、彼も亦類似なる誤謬を犯せることが注目されよう。マルサスは當時の英國に弘布せる諸條件の印象から判斷して、過剰人口が起るといふ傾向の勢力を強張せる意義に於ける人口法則を公式化して居る。マルサスの著作せる當時に於ける英國の地位は特殊であり、小規模工業組織から現代の大工業組織への過渡期でもあつた。食糧供給の増加は非常なる困難に遭遇してゐたのに、他方では新規擴張中の工業の刺戟や救貧法といふ有害なる組織の不健全なる獎勵に依りて人口は増加してゐた。クラムはこゝで「萬人に明白であつたのは人口は増加しつつあり、斯くて附加せられたる人數は、附加的なる努力に依りて各自の生存資料を準備すべき何等の現實的企圖なしにこの世に齎られたといふことである。」とカニングガムを引援して居る。¹⁾

ジュースミルヒとマルサスとは孰れも人口が其を繞る環境の影響下にあると見做す見解に於て對照的なるは興味ある事項である。ジュースミルヒは人口増加からは何等の危險も惹起せざるべきを徹底的に確信し、彼の危險と見做す點は寧ろ統治者が國民を繁殖さすべき適當なる獎勵策を心得ない場合に潜むとした。ジュースミルヒは人口は何處にても過大ならず、而も到る處で僅少過ぎると信じ、住民の増加を獎勵する諸州を利殖することの有益性を常に強調してゐる。他面に於て生存資料は人口の究極限界を劃し、人口制限は往々にして農耕方法の劣れる結果として斯る究極の限界點に到達する迄に行はれることがあると認めると共に、更に彼の常に主張するのは

1) Cunningham, Growth of English Industry and Commerce in Modern Times, pp. 562—564. (Crum, a. a. O. S. 33—.)

人口増加は斯る場合に於ても意氣沮喪することなきのみならず、而もあらゆる可能なる努力が農耕方法の改善の爲に爲され、斯くて將來の人口發展の爲に用意せられるといふことである。

マルサスは大なる人口に好意を示す點に於てはジュースミルヒと同様であるが、併し如何なる條件の下に於ても人口増加を獎勵する必要を認めず、而も人口の増加傾向は頗る猛烈なので、刺戟するよりも寧ろ彎曲せしめられることを必要だとする見解に於ては前者は後者と峻別される。恰も戦争直後の時期とか或は新興國に於けるが如く條件の特殊なる場合を除けば、人口は其時代と場所の事情下に於て、常に出来るだけの最大であることが望ましいことは確實である。

ジュースミルヒとマルサスの立場に於ける對照點を要約すれば、ジュースミルヒは人口増加に對する全障害の除去を肝要なりとし、人口増加獎勵へのあらゆる可能なる準備を爲すべしと主張せるに反し、マルサスは人口制限を必要とし、常に實踐に移さるべきであつて、人口を抑制せる障害を如何にして撤廢するかは全然問題にあらず、少くとも窮乏と惡徳の發生を結果するであらうが如き場合に、其取捨選擇を爲さしむることが問題であると徹底的に確信して居た。

ジュースミルヒは戦争・疫病・飢饉が人口と生存資料との間の均衡維持に必要なりとする説を極力否定してゐることは吾人の讀み來れる如くであるが、他面に於てマルサスは戦争、疫病、飢饉を好んだとは云ひ得られないにしても、文明の或段階に於て其等の故に人口制限を必要ならしむると考へて居るらしい。社會進化に比例して疫病の頻繁に發生して民族を蹂躪する度合が減少し、其他のヨリ溫和なる制限が人口過剰を豫防するのに充分に有力となる。更に文明が進歩すれば戦争も亦減じて、斯る積極的制限が働かなくなると一般に窮乏をヨリ少くす

る豫防的制限が一層有力に作用する。結局に於て結婚からの抑制を含み不規則なる満足に伴はざる豫防的道德的制限なるものが惡徳と窮乏とを最小限度ならしむる様に人口を規制する最適なる手段となるのである。²⁾

ジュースミルヒとマルサスの見解に於ける相違を明瞭化するのに次の説明も役立つであらう。ジュースミルヒは婚禮獎勵を是とし、結婚數の増加は政府の主要なる責務の一とすら考へて居り、政治家にして人口當り結婚數の割合を一二〇又は一二五分の一から八〇又は九〇分の一に増加させることが出来れば其人こそ大いに褒賞されて然るべきだと思つてゐる。然るにマルサスは結婚獎勵の見解で何等かの刺戟を加へることの效用を極力否定して曰く、『結婚への自然的傾向は孰れの國に於ても甚だ大きく、苟くも結婚に適する餘裕があれば何時でも空所を埋めるのだから、この獎勵は完全に繁殖力を有すると共に、結婚への適當なる餘裕なき場合の結婚を爲さしめることとなり、斯くて其結果は必然的に窮乏と死亡を増加せしむるに相違ない』と。之は人口増加への見解で何等かの人爲的刺戟を與へることに對してマルサスの執つた毅然たる立場を説明する一例に過ぎぬ。

マルサスは「神的秩序」を知つては居たが、併し其に依つて影響を受けた證據はない。蓋し彼が一七九八年に人口論の初版を出した當時に於ては、ジュースミルヒの著書を直接に見てゐなかつたことは明瞭であつて、其理由に初版に於けるジュースミルヒの表の抜萃はブライス博士の記載から引用せることで判明する。再版以後に於てマルサスは屢々ジュースミルヒの著書に言及し、神的秩序から中部歐洲の人口狀態に關する統計資料を大いに引用して居る。

ジュースミルヒとマルサスとは人口増加に關する意見に於て動搖し來れる兩極端を代表せるものとも謂ひ得られよう。マルサスへの對抗者は佛國をマルサス主義の驚嘆すべき結果の實例と見倣して居り、佛國では數年間に

2) T. R. Malthus; An essay on population 7th ed., (Everyman's Library) Parallel Chapters from the 1st and 2nd editions (Economic Classics.)
3) J. Bonar, Malthus and His Works, 堀經夫、吉田秀夫共譯「マルサスと彼の業績」571頁、參照。

實際の人口増加は皆無であつた。他方に於てマルサス主義の支持者は斯る事情條件を以て高き文明國の表現であり、其處では廣く一般的に普及せる繁榮が伴つて居り、自國に於ける法外なる低出生率を國家行爲として必要ならば救済するを要する程の害惡と見做すが如き少數の佛蘭西人も佛國には居ないのである。之に反して高き出生率はマルサス主義的ならざる思想家層に依つて國防國家の測定基準として必須缺くべからざる要請なりと考へられる。これこそ新マルサス主義に對抗し之をも克服し得るジュースミルヒ的な指導理念である。

結論として神的秩序は人口統計學の文獻に於ける一の重要な貢獻と見做されねばならぬと謂ひ得られよう。蓋し該著は特に結婚と出生の取扱に於て可成りの獨創性を發揮しては居るけれども、斯る獨創性の故に其程迄に重要であると言ふのではなく、寧ろ人口其自身の爲に最初の完成的研究を試みたるが故に貴重であるのである。之は云はゞ人口の靜的狀態と動的變化とに關聯して、幾多の相錯綜せる問題を含蓄せる事實の最初に於ける組織的な摘要たるの地位を占めるものである。

四

ジュースミルヒが後世の人々に依つて承認さるべき稱號を與へられるとすれば人口統計學の一著者としてであり、彼の主要なる貢績と名聲とは生涯の一著述なる神的秩序にかゝつてゐる。ジュースミルヒの稱揚者 Horney は曰く、『神的秩序は本當の意味で彼の全生涯の事業であり、あらゆる熱慮の中心でもあつた。彼はこの計畫を企て、以來、一瞬と雖も之を忘却せず、其完成の爲に能ふ限りの援助を各方面から集積した。其人の知識が自己を廣めるであらう程の賢者には誰にでも相談した。一言にして云へばこの著者は自らの主觀でもう充分だと満足して了つた様に見えたことは曾てなく、自分一人で爲してゐる事程よいものはないとか、自己のした仕事が爲され

得た最善であると説得するが如きある種の狂信者たることは諦観して居ることの出来た學者であつた」と。

扱「神的秩序」は一七四一年の早春三月シュワイドニッツへの軍旅に於てといふ序文に普國王フリードリヒ大王への獻辭を附してゐる。其の獻辭の由來をクラムは次の如く註釋を加へて云ふ『ジューズミルヒは自著の準備に極度の困難を覚え、統計資料の蒐集には何等政府の援助を受けてゐない。この本が國王に獻ぜられる所以は人口統計に關する資料の蒐集と編纂を促進獎勵する様に官廳を用意せしめたいといふ希望にあつたのである』と。斯くてウオルフの序文と共に自序中に於て人口を主題に研究を執筆せる動機を物語つて居る。併し乍ら、今茲ではDerham, Maitland, Struyckとの關聯に於て「神的秩序」初版の意義を説明すべき資料も充分でないので、この貴觀書の内容に就ての敘述は割愛する外はないにしても、一七四五年にジューズミルヒが伯林翰林院の會員に選ばれたに就いては、この著作の發行が與つて大いに力があつたと見做すクラムの見解は引用して置くべきであらう。

ジューズミルヒが翰林院に這入るや、その總裁にしてフリードリヒ大帝の祕書役たりしMaupertuisはジューズミルヒに勸奨して其著作中に包含されてゐる諸觀察を翰林院で討論させ様とした。この招待は受理され、斯る過程に於て初版に多くの改善や内容の擴張が爲された。ジューズミルヒはこの翰林院内の討論の先頭を切る活躍部分として生々たる關心の標的となつて居た模様である。だからと言つてこの「神的秩序」の第一版が廣範圍に讀まれて居たとか、或は伯林といふ地方的なる讀者層を超えてヨリ多くの世人の注意を牽引したといふ理由にはならぬ。併し乍ら茲でジューズミルヒをして回答せしめた程の一批判者があつたことは特記して置く必要がある。但しこの一七五六年及一七六二年に Göttinger Gelehrten-Anzeigen に發表された批評はジューズミルヒの研究中に於て單に自然科學的若しくは生理學的なる方面に關する評價に過ぎなかつた。²⁾

1) 高野岩三郎著、上掲書、157頁—169頁、參照。
2) J. E. Wappäus; Einleitung in das Studium der Statistik. Vorlesungen gehalten an der Universität Göttingen Lpz. 1881, S. 79.

即ちユステイ Just, J. H. G. v. (1702—71) に依りて問題とされる機會が與へられたのは、ジュースミルヒの結論中特に全人口を基準に計算すれば都市は田舎地方よりも死亡率大なりとする敘述に就いてである。ユステイは人口當りで比較すれば都市よりも田舎の方が死亡率大なりとする反對の立場を採つて、都市にては人口に比例して死亡率が小である理由は死亡率の比較的に頻繁ならざる年齢層の人々に依つて大多數の都市の假寓居が占められてゐるからであると主張して居る。彼は都市住民の大部分は使用人、御者、渡り職人、兵士等であり、田舎地方より都市に於ける人々の死亡率を低く引下げるに充分役立つて居る人口要素から成立つてゐると見做す。神秩序に於ては都市に於ける死亡は平均して約三〇分の一であり、田舎に於ては四〇分の一であると書かれてゐるのに、ユステイに依れば普通の都市は六〇分の一で、倫敦や巴里の如き非常に人口稠密なる都市に於ては百分の一が最も事實に近似せる比例を示すと斷言してゐる。

上述の如き批判に對してジュースミルヒは一七五六年に答へてゐる。獲得し得るあらゆる資料を注意深く解析した後に死亡率は農村地方に於けるよりも都市に於て一層高いとの見解を益々強めるに至つたといふ出版されたジュースミルヒの手紙に對してユステイは長い間何等の應答を爲さず、其後ジュースミルヒはユステイと會見したが、批判も何等の暗示を與へず依然として前の見解を固執する結果となつた。ジュースミルヒはこの沈黙をユステイの改説を意味するものと考へたけれども、この豫想は外れて一七六〇年に前の見解に修正も證明の追加もしないで意見を發表して居る。この書物は既に神秩序の第二版の第一部が殆んど印刷に附せられてゐた際として、ジュースミルヒの注目する所とならずして、ユステイの斯る出方に驚愕したと告白してゐるけれども、再び論争を開始するに價する事項とは考へなかつた。³⁾ 従つてこの時に述べられた事實や到達せる結論が大體に於て一七

3) Süssmilch; Die göttliche Ordnung. Teil II. Ausg. 2, Berlin 1762. 摘稿、都市及び農村人口の自然的繁殖力に就て、經濟論叢、第五十五卷、第六號、(昭和十七年十二月) 參照。Crum, a. a. O. S. 38, cf.

六一—二年の神的秩序第二版に同じ形式で書かれてゐる。

此再版は初版を全く改訂せる新版であつて、兩者の分量の比較はジュースミルヒが一七四一—一六一年の二十ヶ年間に於て區別されるに適當と思はれる程の大擴張といふ感じを與へる。併し前後兩版の書物としての形式的なる懸隔や題目の變更以外に實質的な推移如何が吾々の次の關心事となるべきであらう。

若し初版を改作するためにジュースミルヒの爲した努力が如何に絶大なものであつたかの證據を書籍の分量以外に求めようとすれば、彼自身の文書に見出すことが出来る。僅かに一章を改訂する爲に二ヶ年間も毎夕を之に當てたと述べてゐる。この陳述はユステイに宛てた第二の回答文にあり、参照されてゐるのは年齢別死亡率を取扱へる第六章である。遂に彼が全章を書き改めんと決心せる際に再版の前半の第一部を印刷に附するに至る迄三ヶ年間といふものはあらゆる餘暇を惜しみつゝこの仕事に全力を傾倒したのである。

この新版も亦フリードリヒ二世に捧げられ、著者の言に依れば初版に含まれる諸觀察の効果を陛下が洞察し給ふことの確證が與へられん事と述べてゐる。大帝も亦理性的である人口こそ統治者の主要責務なれといふ論證を統治の期間中に於て教示し給へるのみでなく、人口に關する資料に附隨する事項の重要性に確證を賦與せられた。即ち一七四七年六月命令を發して、全普國諸州に亘つて統計表の書類を作製せしめ而も附加的に資料を既往十五年間に溯及して蒐集すべきことゝされた。

斯くてクラムはジュースミルヒ生前最後の出版なる一七六五年の第三版を舉げ乍らも、初版の有する價值を重視するの餘り次の如く結言してゐる。第一版は其後の版に見出されるヨリ重要な理念全體の芽生を含んで居る。この理念は再版以後に於てヨリよき衣裳をつけ、他方に於て種々なる點で不充分であつたにしても議論の配

置も一層理論的となり、資料のヨリ尠大となれる結果として一七四一年に算出せる諸數値に多少の修正を加へるの餘儀なきに至つたことは當然であつた。

五

以上の如く普國人ジュースミルヒの著作を米國に紹介し、從つてジュースミルヒの理念の世界的なる復活に貢績あるGRAMにして猶且つ次の如き脚註を附加せねばならなかつた理由に幾分乍ら疑問の餘地がある。即ち「クナツプが禁慾的にして無味乾燥なる辯神論から (von einer nüchternen Theodicee) 國民經濟的なると同時に政治的なる著述にまで高揚されたる著作として「神的秩序」再版を擧げること飽くまで主張するのは、恐らく他人を多少乍ら誤解させるであらう。尤も再版に於て神學的なる考察は既に主要部分ではないが、併し猶この書物は科學的といふよりも寧ろ神學的なる討論を強調してゐる。この觀點よりすれば初版よりも其後の版に於て神學的なるものが支配する程度は減少したとは申し乍ら、猶神學的なる潛流は依然として強力である」とGRAMは批評して居る。¹⁾併し乍らクナツプは前述の「神的秩序」再版への評價に續く箇所にて『この著作の如く經驗科學的なる取扱方は當時に於て獨自の存在であり、且つ彼の時代としては普遍的にして遺漏なき完全無缺さであつて、其後に於て再現は期し得られない程であり、從つて第二版は社會科學的に觀察しても人口學領域に於ける最も重要な業績である』とまで禮讃してゐる。²⁾

斯の如き兩者の見解に於ける相違は畢竟するにジュースミルヒを評價するに際して「神的秩序」の初版と再版との何方を選ぶかの問題に胚胎するに過ぎない。この點に就いては幸に我國に於て「神的秩序」の初版に關する考證として高野博士の有益なる研究がある。ヨーンはジュースミルヒの功績を述べるに當つて、『ジュースミルヒは亦

1) F. S. Crum, a. a. O. S. 46, Foot-note.

2) Knapp; a. a. O. S. 76.

3) John; a. a. O. S. 272., und Art. "Süssmilch" in Allgemeine Deutsche Biographie Bd. 37, S. 192, cf.

最初の經濟統計學者と見做されるべきである。其理由は彼が初めて人口變動の源泉として經濟狀態に着眼した點に求められる」と云へるに對して、『此の言は「神の秩序」第二版に對しては適切であらうが、初版に對しては肯綮を得てゐないと思ふ』と斷定して居られる。然らばこの「神的秩序」に於ける初版から再版へとジュースミルヒの學說が發展し來つたことは確實と認められ、從つてヨーンやクナップの「神的秩序」第二版を通じてジュースミルヒを評價する態度は傳統的にも妥當であると謂はねばならぬ。換言すればクラムの稱する如く單に物珍らしきが故に或は神憑を理由として初版のみを以て足れりとするならば、何故に原著者が二十ヶ年の間再版への刻苦勦勵と人生經驗を経た後に於て再び其の成果を世に問はなければならなかつたを理解し得ないであらう。

斯る觀點に立つ秋に、ウェスターゴードも之を引用せるクナップの言葉が「神的秩序」再版を解題する爲にも導きの絲となるであらう。クナップはこの忘れられたる獨逸の學者ジュースミルヒを開祖とする道德統計に於ける法則性と人間の意志自由なる問題に關聯して、ケトレ、ワグナー、バックル及びロンブローゾー、エッティンゲン、ドロビツシュに於て論争が續行され、而も容易に斷案が下され得なかつた事項に對して次の如く明快に語つて曰く『蓋し最近の獨逸學者の言にして正當とすれば、統計學は人間の自由不自由でふ問題を裁決するものに非ず、此領域を寧ろ昔の通りに哲學の範圍に讓渡するのであり、統計學自體としては常に些少なる感謝を享くるに過ぎぬ僅少なる實際的御奉公で満足するのである。然らずんばこの論争に於ける道德統計の地位は恰も乾坤一擲とも云ふべき一六勝負の骰子に身を任せたる賭博女の如きものとならう』と。然らば統計學が他の諸科學に對して有力なる援助を與へ、而も獨立の地位を保持しつゝ相協調して行き得る分野として最も適當なるは人口現象を統計的研究の對象とする人口學に於てであらう。斯る立場で初めて統計學史上に於けるジュースミルヒの地位

4) 高野岩三郎 前掲書、171頁。

5) G. F. Knapp; Die neueren Ansichten über Moralstatistik, Jena 1871, S. II. (Sonderabdruck aus B. Hildebrands Jb. f. Nö. u. St.) Cf. 邦譯書112頁。
H. Westergaard; Contributions to the History of St., London 1932, p. 234.

が再評價され得るであらう。此際に於て折角「神的秩序」第二版を採り上げ乍ら其標題の故に徒らに生半可なる神學觀のみをジュースミルヒに結付けことは餘り妥當ではあり得ない。さればとて逆にジュースミルヒの人口學から神的なるものを絶對的に辨別するには、頗る慎重なる態度に依る暖い理解こそが望ましい。

會てジュースミルヒは「神的秩序」再版中の一章に於て宗教が人口増加に害ありやの議論に次の如く裁決を下して曰ふ。『モンテスキューは「ペルシア人の手紙」中に於てカエサル6)の時代以來、歐洲人口が減退せる理由に基督教及び回教の普及を挙げ、昔の儘の状態で放任された場合に於けるよりも宗教が人口増加に不利になると云へるに對して、自分に採りてはモンテスキューの議論に於ける誤謬を指摘するは容易なりとし、羅馬人が古代に有せる宗教組織よりも一宗教としての基督教に依りて支持せられた場合の方が人類の増加に採つて一層強力にして有利なる實例を樹立し得ることを見出す』と。又この事柄は既に別論文中に於て、『歐洲西部殊に獨逸國に於てカエサル7)の昔より現在（十八世期中葉の方が幾層倍も住民が豊富であり得た譯でもなく、昔は今の半分位の人口が養ひ得られた程度に過ぎなかつたであらう』とも書かれてゐる。

吾々は茲に於て「カエサルに屬するものはカエサルに返し、神に屬するものは神に返し」といふが如く、ジュースミルヒの人口統計學は神としてではなく人間たる彼自身に返し、從つて「神的秩序」第二版の問題に歸すと共に、フリードリヒ大帝の統治時代に於けるジュースミルヒと達と類似にして共通なる立場として長期戦下必然に伴へる繼續的な缺乏に耐へ得て、之に勝ち抜くべき現段階の我が民族に依りて、ジュースミルヒの人口學が新しい人口秩序の統計理論として復活し展開さるべきだと信ずるものである。（昭和十八年二月下旬稿）

6) 織田保之助譯、クナツプの著作解説18頁、(統計學古典選集、第五卷、238頁)

7) Süssmilch, a. a. O. Zweyter Teil, Ausg. II. 1762, Capit. xviii.

8) John, Allg. Deutsche Biographie, a. a. O. S. 193. (Lettres persanes 113-)

9) "Redde Caesari quae sunt Caesaris, et quae sunt Dei Deo" Vulg. Matt. XXII.